

美紗
の会

たより

わが夏の思い出

西松 布咏

秋立つとさやかに人の目覚めけりー子規

目眩のするような暑さが永遠に続くかと思われたこの夏も、お盆が過ぎようやく朝夕微かに秋の気配を感じる。霊魂を招く為の灯りを灯し夏と秋が行き交う微妙な季節の訪れにこの夏に唄った女達を振り返ってみよう。

「忍ばずの女」で東大生岡田への想いを封印したまま永遠の恋に生きたお玉を演じた一カ月後の七月七日吉村翠草さんの地唄舞「鉄輪」の地方を国立劇場でつとめた。他の女に心を移してしまった夫を取り戻さんと恋慕嫉妬のあまり鬼女となるまでを能の謡曲を元に天明四年に出来た地唄である。身分の高い都の女ゆえ激しい怨念のなかでも品位を保ち、思いが滲むように演奏することを心がけた。

七月十四日は軽井沢の鶴間邸で第五回「薊の会」が開かれ、遠山顯氏の琵琶による語りと私の三味線と唄で小泉八雲の「雪女」を共演した。

「雪女」は室町時代末期の連歌師・宗祇による「諸国物語」をもとに一九〇四年小泉八雲が英訳した「怪談」のなかの一つである。今回はNHK「ラジオ英会話」の講師で知られる遠山氏が、美少年の木こり「巳之吉」を殺せずにその出来事を口外しないと約束した雪女が心優しい娘「おゆき」に変身し、やがてその妻となる。幸せな日々うちに十人の子供を生むが夫「巳之吉」がうっかりとその約束を破ってしまう。

悲しみと絶望の「おゆき」は幼い子供達を残して雪女に戻り一筋の霧となって消えてゆく美しくも儚い恋物語に名訳してくださった。

ラフカディオ・ハーンは、こよなく愛した松江の地に妻子と共に居を構えたが異邦人ゆえの壁は越えがたく、疎外感を抱えたまま愛しい子供達に後を引かれながら去らねばならぬ「おゆき」にわが心を重ねあわせたのでは：と胸があつく結末であった。

七月二十五日華生園師の舞の会「文月の会」が高崎シティギャラリー・コアホールで行われ、「長唄・葵の上」の地方を務めた。光源氏の正妻である葵の上の枕辺に嫉妬のあまり夜毎怨霊となって顕れる六条御息所。気位の高い女の分別をわきまえた恋であったが、源氏への想い絶えがたく、我が身から魂が抜け出てしまう不条理に苦しむ挙句、鬼となって消えて行く女の哀しみ。舞台のほの暗い行燈の蔭で願望の炎に身をこがす演奏を終えたとき、私はようやく平安時代の女から現在の女に変わった気がした。

四月のある日、華生園から「布咏さんの唄で『葵の上』を舞いたいのですが」と一本のテープを託された。その曲は男性の声で笛や鼓が随所に入り難曲のうえ聞き取りにくかった。私には荷が重過ぎると返事をためらいながらも、寸暇を惜しんで探譜に着手した。やがてうつつと手ごたえを感じたので作者をうかがった時、我が耳を疑った。なんと私の今日の芸に多大な影響を及ぼして下さった第十一代目富本豊前（石川謹月）師による曲！まさに霊界から縁の糸でたぐり寄せられた瞬間だった。

亡くなる数日前に病室に呼ばれ「私の芸を君に継いでほしい」と三十数年前に秘かに仰って下さったことが鮮やかに甦る。それから師の亡霊に叱咤激励されながら納得の行く我が曲になるまでひたすら唄い続けたこの夏だった。



今年は秋の公演がいつになく続くのでお盆休みをとり八月十五日から熱海に行った。加藤さんのお母様が七月五日に熱海の病院で逝去されたので新盆のうちに訪れたかった。華道や茶道の師匠としてだけでなく母親の様に慕われていたが晩年は熱海に住み俳句や水彩画を愉しまれたという。

今年の一月には「作品展」を開いて親交のあった方を招き覚悟のうちに最後のお別れをしたという。いつも凛とした着物姿で微笑みを絶やさない暖かいお人柄だった。

その夜は今も亡き人や先祖の霊を慰める百八体の篝火が海岸沿いに赤々と燃え、やがて漆黒の空に火花が上がった。海の広がる部屋のテラスから浮んでは消える火花と共に友人とその面影をしみじみ偲んだ。一昨年の秋、京都の「アジール公演」の折に紅葉狩りに娘が誘ってくれたと、とても嬉しそうにその晩は一緒にグラスを傾け、私に草履をプレゼントしてくださった。その時のことを「思い出を残して終わる京紅葉」と綴り、鮮やかな紅葉の下を歩く母娘の絵も残された。「布咏さんの唄をこれから応援してあげてね」との遺言もあったと聞き、思わず胸がいっぱいになる。

激しい恋に身をこがした女達を唄いながら、亡きひとと暑き熱き日々を過ごした忘れえぬわが夏の思い出である。

「境界」めぐるスリリングな競演

高橋 幸治

六月一日、高輪区民センターに「月虹染衣舞くらゐ」忍ばずの女」を観に行った。

夏目漱石と並ぶ明治の文豪・森鷗外「雁」をテーマにした構成で、出演は西松布詠師匠を中心に、日ごろ美紗の会でもお世話になっている花柳千寿文先生、舞踏家の大野慶人さん、音楽家の辻井人さんといった豪華な顔ぶれ。邦楽という枠内だけにとどまらず、他ジャンルとのコラボレーションにも積極的に挑戦してこられた師匠の新作だけに、どんな競演になるか楽しみであった。

第一部の冒頭、師匠が会のタイトルである「月虹」について解説する。「月虹とは夜（闇の世界）と朝（光の世界）の境界に現れる白色の虹であり、音楽や舞踊といった芸能が持つ、彼岸と此岸を結ぶ境界性、と通ずるものがあるのではないかと」と。この口上を聞いた瞬間、これからステージ上に繰り広げられるであろう世界の輪郭がぼんやりと想起できたような気がした。四人の演者が各自のジャンルで「境界」を表現しながら、且つ、邦楽、舞踊、舞踏、洋楽というそれぞれの「境界」が融合したり反発したりしながら不思議な空間が立ち現れる。「まさに月虹染衣舞くらゐ」と、師匠の挨拶を聞きながら考えた。

日ごろから編集者という自分の仕事は、既知のものと未知のもの、本流と傍流、可視的なものと不可視のもの、現在と過去（もしくは未来）、人口に膾炙したものや周縁に排除されたもの、それらをまったく新しい文脈で連結／結合することだと思っている。要するに編集者というのは、こちら側、に属しながら、あちら側、の暗い淵を覗き込んだり、あちら側、に突然飛

び込んで、こちら側、に存在しないものを持ち来したりする。「境界」の往還者なのである。あらゆる文化は「境界」に発生する。ヒトモノも情報もすべて、異なるもの同士が出会う「境界」で新たな何かに変容する。

冒頭の予感通り、師匠の唄と三味線は現在に江戸、明治という過去の時間をたぐり寄せ、現実と物語のあいだをたゆたう、千寿文先生の舞踏は時に艶かしく、時にあどけなく、女性の持つ多様な表情を愛幻自在に表現した。大野さんの舞踏は人間の肉体を軽やかに逸脱し、蛇や雁の姿に限りなく移行し、辻さんの歌声は意味を持った言葉（歌詞）と意味を成す以前の呻きや叫びの狭間を浮遊した。まさに四人のアーティストたちがそれぞれが、独自の方法で会場に「境界」を横溢さ



photo:GO

せていた。そして異質な芸同士が出会う「境界」に、岡田に対するお玉の叶わぬ想いが紡ぎ出されていた。社会学者の加藤秀俊氏は名著「メディアの発生と聖と俗を結ぶもの」の中で、歌舞伎、能、落語、演歌、浪花節、替女唄などなど、日本の歌舞音楽は人と人、カミと人間とを結ぶメディアである」と述べている。芸能の神髄とはそうした、何かと何かを結び付ける力、なのだろうし、芸能に携わる者は、こちら側、と、あちら側、の「境界」を縦横無尽に行き来できる者なのだろう。

一年程前、奇遇にも師匠と私は同じ映画を観た。「スケッチ・オブ・ミヤコ」という、宮古島にいまも伝わる神歌と古謡を描いたドキュメンタリー映画である。宮古島の女性たちは神への畏怖と畏敬を表現するために、古来から島に伝わるアーグ（宮古島の方言による詩歌）を用いる。そしてひと時の間、神と繋がり、神との交感を果たす。彼女たちはまさに、彼岸と此岸の間（あいだ）「境界」に降り立つ人々であり、その仲立ちとなる音楽の原点をまざまざと見せつけられたような気がした。

「月虹染衣舞くらゐ」忍ばずの女」は、そんな芸事と「境界」にまつわる私の関心を改めて思い起こさせてくれた。仕事と稽古はいつでもどこかで交差する。仕事は二十年もやっているから、まあ、何とか様になつていいるとは思いますが、自分の唄と三味線が「境界」を表現できるまで、あと何年かかるだろう…。

解き放たれるものは

ヤリタミサコ

鳥籠の中には、鳥がいるのではない。籠の中に閉じ込められているのは、心。籠から逃げ出したのも心。籠の中に見えないが存在している。

鳥籠の小さな空間そのものを捕えるように、誰かの白い右手が動く。この映像では、蛇が籠の鳥を襲うエピソードが抽象化され、ひとりの女の運命が暗示されている。そして観客の目は、鳥籠の奥にたえずむ女に吸い寄せられる。帯止めが美しく鳥籠を見つめている。格子のその奥に隠れるように、「見る」女。隔てる格子があれども、自分の意志で何かをまっすぐに見つめている。見つめるものは籠の中で、それは自分の心。

大野慶人さんは、傑のクリストのように全人類のすべての悲しみを身体に取り込み、あふれさせて静止した。パッションとはクリストの受難であり、かつ恋愛の熱情なのだが、ここで慶人さんは、籠に閉じ込められた心のパッションとして、舞台上で受難した。悲しみと慈愛に満ちたピエタのごとく。そして受難の後に、雁となって復活する。自由自在に飛翔する雁。女心が清涼な魂になり、雁の姿で天空を駆ける。格子の奥



photo: 黒名尚人

から脱出し、すべての引力や重力やしからみから解放された鳥となって。軽々と楽々と。

辻軍人さんの演奏は、初めはプリペアドピアノで音色が変えられていて、どこか人間くさい。ピアノがおしゃべりするように聞こえる。ときには小鳥の声のよう。人間と天使の中間のような、色彩豊かなボイスが辻さんから発せられ、悲しみの色も囚われの身も運命のいたずらもすべて、音の波に揺られて流れていく。ピアノと同期して点滅する灯りが残像となり、音色が残り香を残す。言語を超え、時代を超え、生きることのアンビバレントが淡々と紡がれていく。

花柳千壽文さんの肩が腫れ出す、抑えても抑えきれない感情。帯の傾きが語る女心の切なさ。女の心は傘の内にある。あらわにはできないが、雪のようにおのずから光を発してしまふ恋心。抑え、発し、抑え、発し、矛盾する身体と心。

第一部では、「ミミクリイ」という語が語られた。忍ぶ女という擬態で世間をやりすこしながら、心は忍ばずの女。「忍にこもりて泣く女」という擬態を取っていても、心の真実は「月に帰りに行く雁」となって空高く飛ぶ。

舞台の最後にはスワンソングのような、西松布詠さんの「忍ばずに生きたかりけり」の声がかくーと細くのびる。見えない綱糸が放物線を描くように喉から放たれ、はらりと、聞き手の心に触れていく。一瞬の陶醉と同時に消え去る、その恍惚とはかなき。思いの深さはひとすじの糸。

風に揺らぎ、運命に揺られ、格子に隔てられ、時の谷間に迷いながらも、女は「忍ばずに生きたかりけり」。あきらめと失望と諦念の果てに出会う、自分自身の内なる声。その切望は、布詠さんの喉から「生きたかりけり」と解放されていく。悲しく明るくやるせなく自由、そしてひやかに。

「雪女」で一緒にするまで

遠山 顕

七月十四日、軽井沢「薊の会」では、西松先生と一緒に「雪女」を弾き語ることができ、学びの多い楽しい時を持つことができました。以下、先生との出会いから軽井沢までの経緯を、物語り風に述べさせて頂き、感謝の言葉を致します。

まずは、自己紹介がてら、私が港区白金台に移り住んだのは二十年ほど前になります。ほどなく、自然教育園の水源枯渇が危惧された地下鉄工事が終わり、池

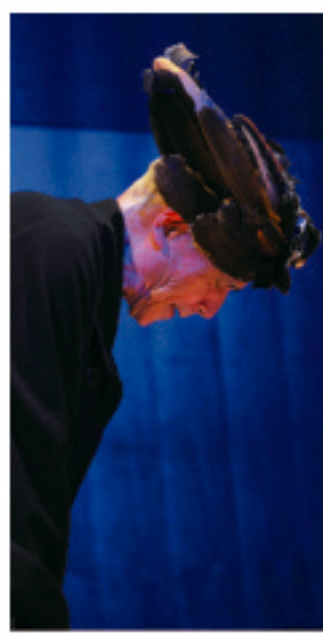


photo:GO



photo:GO



photo:GO

や森は残ったものの、周辺のこじんまりした風情は一変しました。その間、私にも変化が訪れ、期するところあつて大学での職を辞し、講演や執筆の他、十二年ほど担当した「ラジオ百万人の英語」終了後に依頼を受けたNHKラジオの英語講座などの仕事を始め現在に至っています。また、十代で、英語で言うところの「teen by the theater bug」(演劇の虫に噛まれた)となり、日英両語で演劇活動を行っていましたが、過去十年間は特に、和英一人芝居や、筑前琵琶での古典や民話の弾き語りを中心に活動しています。癒しの大笑いと涙一滴を求め「笑涙琵琶語り部」と称しております。

ちなみに、三味線の大ブレイクの陰で、徳川三代將軍の庇護に入ってから以後、琵琶は浮世からやや遠ざかり、奏者の多くが三味線のプロへと転身したということですが。しかし維新後、明治後期に筑前琵琶が発明され、五弦のうちの細い四と五の共鳴弦が、琵琶らしからぬ三味線に似た音を出すところが受けたか、大流行したといえます。

さて、昨年のある日の午後、近くの喫茶店「ぶどうの樹」でゆったり珈琲を頂いていると、かの博覧強記のウエブサイトの主でもある松岡正剛と着物姿のご婦人が華やかに入店し、しばし芸談義に花を咲かせるとさっと消えたのです。ご店主が、お経がせしました、と仰るので、あれ松岡さん？ と尋ねると、ご存じです！ と仰る。そこへ先ほどの麗人が戻って来る。と、ご店主が、こちらの方、松岡さんご存じですって。麗人が、あらあ。私が、まあそのサイトで……。お二人がご姉妹だといひ、コンサートのチラシを頂き、何とはなしに話がはずみ、やがて軽井沢へお誘いいただくことになった次第です。

舞台では、先生が雪女とおゆきを、私が語りと巳の吉を演じ、三味線が女を、琵琶が男を表すという仕掛

けとなりました。先生は、直前の「美の上」で、凄まじい怨念を唄い上げ、次もその勢いでと私は思っておりました。が、「雪女」では、義理の母に尽くし、十人の子を産み、異種なる人間という生き物への愛を全うしようとする妖怪の健気さを演じられました。原作の小泉八雲は、詩人・再話家・ジャーナリストといった多彩な顔を持ち、一八九〇年に来日し、日本人と結婚し、子供達の将来を案じて帰化したと云われています。おゆきの懸命な生き様には、異文化の中で格闘した自身と、異国の男性と結ばれた妻節子の心構の両方が投影されていると思われまふ。八雲が練り上げ再話した完成度の高いこの悲話の中にあつて唯一明るい家庭生活の場面に、先生は粋な小唄を挿入されました。何とも素敵な江戸の恋物語になったなど、私は嬉し涙一滴を心の中で流した次第です。

縁とは異なるものと申しますが、私の人生に於いて、とっておきの出来事の一つとなりました。



《今後の予定》

九月二十一日(土) 国立大劇場 午後四時

映の会 会主 坂東三津映
地唄 雪 舞 坂東三寿早
地方 西松布咏

九月二十九日(日) 証券会館ホール 午後一時半

千壽文の會 会主 花柳千壽文
地唄 忘れぬ歌 舞 花柳錦吾
地唄 黒髪 舞 花柳千壽文
地唄 七福神 舞 花柳寿案 他

十月十九日(土) 新潟 角田山妙光寺 午後六時半

十月二十日(日) 新潟 角田山妙光寺 午後五時半

アジール新潟公演 生ける場所―絵画・映画・舞踊・江戸唄による

十一月二日(土) 弘前 浄土堂専求院 午後四時半

十一月三日(日) アジール弘前公演 生ける場所―映画・唄・ダンスにより綴られる

三味線・唄 西松布咏
振付・ダンス 寺田みさこ
作・演出・映像 飯名尚人

十一月十六日(土) 赤坂クラブ大広間 午後一時半

第四十六回 美紗の会のつどい 美紗の会一門の演奏と親睦のつどい

■たより第76号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保 朋子

デザイン 近藤 幹則

主 宰 西松 布咏

稽古場 港区白金台三、二 白金台ブレイス三階

電話 (三三三) 二七二六 (五四四七) 二四二二

E-mail: nfu@soleil.ocn.ne.jp
URL: http://www17.ocn.ne.jp/~mises5